平成 20 年度

第３回九州圏における地域の存続・再生に関する調査検討委員会

【議事要旨】

日時：平成２１年３月２３日　１３：３０～１５：３０
八仙閣　４階　雅の間

＜出席委員＞
小川委員長、矢田アドバイザー、山田委員、
北園委員、吉武委員、森北委員

◆議事

（１）第 2 回調査検討委員会での意見と対応

了承された。

（２）先行事例調査の取りまとめについて

- 集落の抱えている課題は多様であるため、知恵袋集の取りまとめには複数の目標に対応させたり、組み合わせを行うことが大事である。また、それを発想した人は誰かということと、そこまで漕ぎつけたリーダーは誰か、その人はどういう役割を担っているのか、あるいは、誰が応援してくれたのかというところと、集落の条件が合わせて見えるようにする。(吉武委員)
- リーダーの人が何を目的に取り組んだのか、その気にさせるためにはどういう工夫をしたのか、取り組みの内容よりも、なぜそれに取り組むのかという取り組みの精神論的なものについてもふれる。また、一つ一つの取り組みが単独ではなく複合して起こっているということ、その関連性を問いかけられるような工夫が必要。（小川委員長）
- 多くの先進国では初期医療までは資格を持った看護士でも出来る制度になっている。医師を増やすには時間がかかるので、この制度を日本でも採用できると良い。（矢田アドバイザー）
- 知恵袋集というのは発想としては面白いが、活字にしてしまうと、いいものが面白くなくなる。生の人間がディスカッションしている風景がイメージできるようにしてはどうか。（矢田アドバイザー）
- 今回のワークショップのビデオも編集して動画配信が出来るようなことをやるとインパクトを与えられるかもしれない（小川委員長）
- 先行事例は知恵袋集としてとりまとめ、今後事例を増やして情報提供を行う。（小川委員長）

（３）集落元気づくりワークショップ開催報告

- 過疎の状況として、元々かなり大きい集落が過疎化しているのか、世帯や人口がどの程度減ってきたのか等の情報がわからない。今後の調査では、人口・世帯動向についての情報(国勢調査等)を把握することを検討願いたい。(矢田アドバイザー、山田委員)
- 集落がどのような特徴を持つ集落なのかを把握することが大事。過疎の進行状況、外からの出入りなど、八重集落の実態がどの程度一般的かということは、今後、他の議論するときの大きなヒントになる。（山田委員）
- 活性化のエネルギー源として、Ｉターン者や集落住民の出身地、地域外部との交流の有無について把握することも検討する。（山田委員、小川委員長）
- Ｉターン者の奥さんたちがどこの出身なのかを調べるだけでも地域外部との交流があるのかということがわかる。また、一家で離村した人たちがその地域とどの様な関係を持っているのかなど、お寺の檀家組織から調べるなどして、外側に広がる関係者の調査手法も今後検討することが必要。(小川委員長)

（４）集落元気づくりへの支援策の提案について

- 大学の地域貢献として、集落活性化を各大学が得意なところでやっていくと効果的。地域再生に果たす大学の役割は大きい。(矢田アドバイザー)
- それぞれの大学の体験型学習に任されるのか、それとも誰かが情報提供するなど、交通整理をしてみなで取り組むのか、という問題は大きな問題であり、次にどう活かすのかにも関わってくる。（山田委員）
- 中間組織の話も大学を含めて出たが、各大学で地域に対する取り組みをどういう形でやっているかということを先ずまとめてほしい（北園委員）
- 中国地方の中山間地域研究センターを徹底的に分析すると、次のステップに進む手がかりにはなるのではないか（山田委員）
- 中国地方でやっているようなことを知事会に提案すればがんばれるのではないかと思う。大学も自主的に横に繋がるような連携をしなくてはならない(矢田アドバイザー)
- 今回の調査は、まだ入り口にさしかかった段階。集会所もなく、集落元気づくりへの取組意欲も低い小規模集落の人たちが何を考えておられるのか、それに対してどのような行政としての関わり方があるのかということについて、もう一段調査が必要であり、次年度以降の取り組みが課題。（小川委員長）
- 5 つの提案については、それぞれすぐにできることと、これから関係各方面と色々な方面で接触しなければできないようなことがあるが、今回の八重集落での経験から得た一つの方向性としてしっかりとまとめていく。（小川委員長）

（５）その他

- 今後の展開が非常に大事。来年度も予算を確保しながら、この委員会、調査検討を続けていきたい。（森北委員）